第12回　幼児教育実践学会　発表資料

「幼児が遊び込める環境構成と教師の援助を探る」

指導助言者　岡山大学院教育学研究科　特任教授
岡山大学附属幼稚園
園長　井山　房子先生

発　表　者　学校法人虫明学園　中仙道幼稚園
教　諭　冨谷　知子
教　諭　大山　真実

1．園の概要

本園は、岡山市の南西部に昭和55年に開園し、今年の10月に42周年を迎える。

現在、園児217名、28 名の教職員で幼児の教育に取り組んでいる。

園を取り巻く環境は、平成 17 年に西バイパスが開通して、ベットタウンとしてマンションや商業施設が次々とでき、都市化が進み、学区の人口も急上昇している地域である。開園当初から園庭の周囲には、実のなる樹木や果樹を植え、四季折々の花や野菜の栽培など、一年を通しての豊かな自然環境の中で幼児が自然と触れ合う機会を大切にし、「明るく元気で、素直な、たくましい子ども」を教育目標に思い切り遊ぶ体験を通して「生きる力」の基礎を育んでいる。また、幼児主体の保育をいかに充実させるかを大きな課題として実践に取り組んでいる。

2．研究テーマ設定の理由

本園の幼児の実態として、素直で優しい、自分のしたいことを伸び伸びと楽しめる、いろいろなことに興味をもって関わろうとする、友達や生き物（自然）に対して思いやりをもって接することができる、などの姿が見られる反面、きっかけがないと遊べない、目的がもちにくい、遊びに対して受け身、遊びの面白さに気付きにくい、遊びが継続しにくいなどの姿も見られた。また、教師は遊びをどう捉え、どこまで、どのように遊びに関わればよいのか、幼児よりも遊びに関わり過ぎたり、出過ぎたりしてはいないかなどの悩みを抱えていた。

そこで、研究テーマとして「幼児が遊び込める環境構成と教師の援助を探る」と設定し、遊びの充実を図り、幼児が心から楽しみ遊び込む幼児の姿を求め、研究を進めていくことにした。

3．研究方法と内容

（1）　遊び込む姿の共有、環境構成と教師の援助の仮説を立てる

学年ごとに「遊び込む」姿をどう捉えるか話し合うことで共有し、その姿を目指す為の環境構成と教師の援助についての仮説を立てる。

（2）エピソード記録から読み解く

仮説を意識しながら日々保育実践を行う中で遊び込む姿が見られたエピソード記録（実践事例）をとる。その記録を基に、学年や全体で事例検討を行う。その際、付箋に各自の考えを書いて一人一人の意見が集まるようにした。

（3）仮説を立証する

事例検討から仮説を立証したり新たな要因を探ったりする。

４．遊び込む姿の共有と環境構成･教師の援助の仮説

＜3 歳児の遊び込む姿＞

姿に対する○環境構成☆教師の援助（仮説）

興味をもつ
･いろいろな遊びをしてみようとする姿
･様々な遊びに興味をもつ姿
･傍観しながら遊びに参加する姿

○安心できる環境
☆ありのままの姿を受け止める
☆信頼関係を築く

してみたいと感じる
･自分から遊びに関わってみる姿
･自分なりに遊んでみる姿
･自分から人に関わってみる姿

○してみたいと思えるような環境
☆幼児の思いを受け止める
☆内面理解をする

好きな遊びを見付ける
･したい遊びを見付けて遊ぶ姿
･好きな場や道具を見付けて遊ぶ姿
･落ち着ける場所を見付けて遊ぶ姿

☆一緒に遊びを楽しむ

繰り返し遊ぶ
･繰り返し遊ぶ姿
･楽しかった経験を思い出して遊ぶ姿

○幼児の興味に沿った環境
○興味をもつことができる環境
☆遊ぶ時間の確保

＜4 歳児の遊び込む姿＞

姿に対する○環境構成☆教師の援助（仮説）

興味・好奇心

・自分からいろいろなことに興味をもっている姿
・なぜ？何？と疑問をもつ姿

○幼児が興味をもっていることを取り入れた環境
○幼児の興味に合わせて、環境を再構成していく
☆幼児の思いを受け止め見守る
☆教師も一緒に遊びを楽しむ
☆幼児の思いに寄り添い、共感したり提案したりする
☆遊びの振り返りをする時間をもつ

してみようとする

・自分がしたいことを選んでする姿
・自分からいろいろなことをしてみようとする姿

○自由に遊びを選ぶことができる環境
○いろいろな遊びを経験できる環境
☆遊び込める時間の確保

繰り返し遊ぶ

・試したり工夫したりして遊びを展開していく姿
・夢中になって遊ぶ姿
・繰り返し遊ぶ中でいろいろなことに気付く姿

○遊びを引き続き楽しめる環境
○試したり工夫したりできる用具や材料の準備をする
☆繰り返し遊ぶことができる時間や場所の確保

主体的

・自分から進んで遊びに取り組む姿

○興味をより深められる環境（図鑑や絵本など）
☆幼児の思いに共感する

＜5 歳児の遊び込む姿＞

姿に対する○環境構成☆教師の援助（仮説）

興味・好奇心
・なぜ？何？と興味や関心をもつ姿
・好奇心をもって自分から関わる姿

○幼児の目に入りやすい遊びの場の設定
○視覚的な刺激となる環境（絵本や写真など）

目的をもつ
・自分なりに目的をもって遊ぶ姿

☆クラスで遊びの話題の共有、話し合いをする

試行錯誤
・いろいろな方法で、繰り返し試したり工夫したりしながら遊ぶ姿

○選択できる用具、材料の用意
○道具や空間を自由に使える環境

持続
・夢中になって遊ぶ姿
・一つの遊びが継続する姿
・途中で諦めずにし続ける姿

☆一緒に考えたり、考えるためのヒントをタイミングよく出したりする

人との関わり
・友達と思いを伝え合う姿
・友達と協力する姿
・友達と一緒に遊びを発展させていく姿

○友達と協力し合える材料の大きさや数の準備
☆教師も友達の一員となって一緒に遊ぶ

主体的
・自分のしたいことに自信をもって取り組む姿
・自分の思いを伸び伸びと表現する姿

○したいことが自由にできる環境
☆幼児に任せる
☆幼児の思いに寄り添う
☆自由に思いを出したり、表現したりできる空間、雰囲気を作る

5．実践事例･考察

3 歳児 『泥遊び～ぺたぺたがりがり～』　『どれがいいんだろう？』
4 歳児 『あのセミを捕まえたい！』　『本物みたいなシャワーにしたいの！』
5 歳児 『シャボン玉に入ってみたい！』　『ドングリレーシングカーで遊ぼう！』

事例①3歳児　6月『泥遊び～ぺたぺたがりがり～』

どろどろの土でパンケーキや団子を作って遊ぶ中、A児とB児ら2人が泥をしゃもじで「ぺたぺた」と叩いたりこねたりし始めた。A児が「ぺたぺた面白い」と言うと、B児らも「ぺたぺた」「ぺたぺた」と言い、3 人で顔を見合わせながら、泥をプラスチックの容器に入れ始めた。しばらくすると、乾いた土のところをA児は「がりがり」と言いながらしゃもじで、力いっぱい削り始めた。教師は幼児の言動から、泥を固めて遊ぶと面白いのではないかと思い、泥の入ったプラスチックの容器をとっておくことにした。

翌日、泥遊びをし始めたA児の目に付くところに昨日のプラスチックの容器を出してみた。
「昨日のだ」と触り始めるA児やB児。周りの幼児も「硬い」「かちかちだ」と驚きながら指先で押して確かめる。プラスチックの容器を裏返し、出てきた丸い塊を見て「うわー、すっげー」「僕も、僕も」と触り始め、「雪だるまだ」とその塊を重ねて遊ぶ。
しばらくして、B児がジョウロを持って来て塊に水をかける。「あっ、溶けた」「溶けてなくなった」と不思議がるA児。B児はその言葉を聞いて再び水をかける。「先生見た？溶けた」とA児が言うと、B児も「見た？」と嬉しそうにもう一度水をかける。「あっ溶けてなくなった」と教師が驚くとB児は「うん」と嬉しそうに頷く。A児もジョウロを持って来て水をかける。A児が「ほらっ、先生」と溶けてなくなった場所を触って見せる。教師も「本当だ」とその場所を触ってみる。そういった姿から泥という一つの環境から泥の性質や感触を体感していることが分かった。

次の日も遊びの続きができるように置いていた泥の塊をC児とD児が取り出し、2人で削っていく。土の固さと削ってなくなっていく面白さに夢中になっていた。
別日には、固まったプラスチックの容器の泥を3人の幼児がおたまで削ろうとした。「なかなか削られへん」と勢いよく削ろうとした時に、おたまが泥の塊に当たり「こん」といい音がした。その音に気付いて3人は、嬉しそうに「こん、こん」と言いながら何度も叩いていた。手の感触だけではなく音でも硬さを感じていた。

＜考察＞

・毎年水遊びの一角で泥遊びをしていた為、教師自身これまでに注目した遊びではなかった。泥遊びの中で、ごっこ遊びをどう楽しむかという固定概念に捉われていたように思う。幼児と実際にじっくりと遊ぶ中で、泥の「ぺたぺた」「がりがり」「こんこん」という発言から遊びや環境に対する考え方が変わった。環境を通して泥の感触や性質を知ることができた。遊びの中でどんなことを経験しているか見取っていく面白さを学ぶことができた。

・例年遊んだ物はすぐに洗い、片付けていた。翌日までとっておき、遊びに使うことで、いろいろな遊び方を楽しんだり感じたりすることができた。「がりがり」とした土の状態、「ぺたぺた」の泥の状態、一日置いた塊の状態、水で塊がなくなる様子などのいろいろな状態の土に触れて遊ぶことでいろいろな土があることを感じる環境となった。環境の出し方、教師の考え方一つで遊び方も変わることを実感した。

・3歳児は発言することが少ないが、小さなことも敏感に体感している。その為、教師の読み取りや体感できる環境が重要になってくるのではないかと思った。幼児がつぶやいたことや行動したことを捉えながら、環境作りをする必要がある。

・テラス前や保育室の目の前など目に付きやすい場所に環境を設定しておくと、より興味をもって遊び始めていた。3歳児にとって環境を設置する場所も重要である。

＜幼児が遊び込んでいる要因＞

環境構成（○仮設に繋がる環境　●環境の新たな要因）
●引き続き遊ぶことができるように思い出すきっかけとなるような目に付く環境 ●感触や性質の違いに気付けるような環境 ●次の展開を見通した環境を再構成 ●発見したり不思議に思ったりする感情体験のできる場や物
教師の援助（☆仮説に繋がる教師の援助　★新たに捉えた教師の援助）
☆幼児の気付いたことや興味をもったことに共感する ☆言葉が少ない分、表情や動きから興味や関心、心情を見取っていく

事例②3歳児　7月『どれがいいんだろう？』

連日、不安定な様子で登園していたＡ児。保育中に度々母親を思い出しては涙が出る日々が続いていた。Ａ児は、カップで水車に水を繰り返し流しながら遊ぶ周りの幼児の姿を見て、「あれ、したい」と興味を示す。様々な容器が入っているカゴから小さめのカップを選び、水車に水を流し、水が流れていく様子をじっと見ていた。2回程水を流すと別の容器を水が流れ落ちる場所に置き、再び水を流し始めた。しかし、水を流し入れるところと水が流れ落ちるところの高低差がない為、うまく水が入らない。2回程水を流すと水を注ぐ容器を少し大きめのカップに変えて再び水を流し始めた。容器に水を溜めたいのかと思い、教師は水車の下に台を置いて高低差を作った。すると、高さができたことでうまく容器に水が流れ落ちる。容器に水が溜まり、Ａ児は喜ぶと思っていたが、Ａ児は何も言わず、表情も変わらない。すると、Ａ児はまた別の容器を探しに行き、今度は、缶の蓋で水を流し始めた。これまでは2回程で容器を変えていたが、何度も缶の蓋で水を注いでいる。

教師もＡ児の真似をして缶の蓋で水を流してみた。「この蓋だとたくさん水が運べるね」と声を掛けた。するとＡ児は教師を見て、驚いた表情をした後に、満足した様子でこの日は片付けの時間までお気に入りの容器を使って繰り返し水を流すことを楽しんだ。

翌日も自分から教師を誘い、昨日のように繰り返し水を流し込むことを楽しんだ。この日以降、安心した様子で一日を過ごす姿が見られるようになった。

＜考察＞

・Ａ児は、水をたくさん溜めることよりも繰り返しの動きの中で、自分にとって水を流し込む時に使いやすいお気に入りの容器を探していたのである。3歳児は特に、思ったことや感じたことを言葉よりも表情や動きで表すことの方が多い。今回のように、Ａ児の行動に合わせて教師が同じように動いてみたり、同じ目線に立って物を見つめたりしたことがＡ児の心の動きや行動の理解に繋がったのではないかと考える。また、この事例をきっかけに一日を通して安心して過ごしたり、Ａ児から教師に声を掛けたりする姿が見られるようになった。幼児の行動や心の動きを温かく受け止め、理解しようとしたことでＡ児は安心感をもって遊びを楽しむ姿に繋がったのではないかと考える。改めて幼児理解の大切さを感じたＡ児との関わりであった。

＜幼児が遊び込んでいる要因＞

環境構成（○仮説に繋がる環境　●環境の新たな要因）
○気に入った道具や場所を見付け、安心できる環境 ●道具や材料を自分で選んでしてみることができる環境 ●発見したり不思議に思ったりする感情体験のできる場や物
教師の援助（☆仮説に繋がる教師の援助　★新たに捉えた教師の援助）
☆幼児の興味や関心を探り、教師も一緒に遊ぶ（幼児と同じ動きで遊びを楽しむ） ☆幼児の気付いたことや興味をもったことに共感する ☆言葉が少ない分、表情や動きから興味や関心、心情を見取っていく

事例③4歳児　7月『あのセミを捕まえたい！』

毎日のようにセミ捕りをしていたある日。登園時、園庭の木にセミを見付けた A 児は、保育室に来てすぐに、「あそこにいたからすぐに捕まえに行きたい！」と、慌てた様子で伝えに来た。その声を聞いていた周りの幼児も一緒に、セミを捕まえに行く。幼児のしたいことがすぐに実現できるように、教師も一緒に行き、近くで見守ることにした。園庭に行くと、木の高い場所にセミはいた。「これじゃあ捕まえれない！先生が捕まえて！」と言う A 児。教師は、A 児の思いを受け入れ、虫取り網で捕まえようとする。しかし、セミは虫取り網が届かないほど高い場所にいる。「セミが高い場所にいるから、先生も届かないな。どうしたらいいかな？」と、投げ掛ける。すると、B 児が、「この網で、木をガサガサしてみたらいんじゃない？それで、飛んだところを捕まえてみよう！」と、提案した。B 児が考えた方法で試してみると、セミは飛び、他の木にとまった。先ほどより低い場所にとまったので、C 児が捕まえようとするが、届かない。「A くんは背が一番高いから、A くんだと捕れるかも！」と、C 児に言われ、A 児が捕まえようとするが、あと少しのところで、届かない。がっかりする様子を見て、「どうしたらいいかな？」と、教師が再び投げ掛けると、「あのセミが捕まえたいのに！どうしたらいいんだよ！先生も考えてよ！」と、諦めきれずに困った様子の A 児。「網はあるけど届かないんだよね？」と、教師が具体的に捕まえられない原因を伝えてみると、「網が短すぎるんじゃない？」と、網の長さに目を向けた B 児。そこで、教師が、A 児と C 児が持っている網を繋げて、長い網を作った。長い網で A 児が再び捕まえようとするが、網が長すぎてうまく動かすことができない。それを見て「A くんが上を持って、僕と B ちゃんで下を持とう！」と、提案する D 児。3人で再び捕まえようとするが、うまくいかない。その後、セミを捕まえることはできなかったが、片付けの時間まで、いろいろな方法を試していた。

＜考察＞

・「セミを捕まえたい」という強い気持ちがあったことで、途中で諦めずに最後まで夢中になり、セミを捕まえようとする姿に繋がったと考える。その際、教師は、幼児の思いを受け入れつつ、幼児自身が考えて試すことができるように見守ったり、手伝ったりした。幼児が、してみたいと思った時に、すぐに試してみることができるような環境を確保することが大切であると分かった。
・セミを捕まえることを通して、自分で思い付いたことを試す姿だけではなく、友達が考えたことをヒントにいろいろな方法で試す姿が見られた。遊びを通して友達との関わりが増えてきている中で、教師は、友達の思いや発見に気付くことができるような具体的な声掛けや関わりが大切であると分かった。

＜幼児が遊び込んでいる要因＞

環境構成（〇仮説に繋がる環境　●環境の新たな要因）
〇幼児が自分で扱える用具や素材の準備
教師の援助（☆仮説に繋がる教師の援助　★新たに捉えた教師の援助）
☆幼児が遊ぶ姿を見守ったり一緒に遊びを楽しんだりする ☆遊びの実態に合わせて一緒に考えたり提案したりする ★状況を言葉にして説明することで、幼児が自分でしていることを再認識したり、考えるきっかけとなるようにしたりする ★幼児の姿や遊びを通し幼児理解を深め、友達同士を繋げる関わり

事例④4歳児　2月『本物みたいなシャワーにしたいの！』

１学期から繰り返しおうちごっこを楽しんでいた数人の女児達。1学期は、保育室にあるままごとコーナーで、玩具を使っておうちごっこをしていた。2学期になると、自分達で必要な物を作ったり、段ボールで家を作ったりして楽しむようになった。その様子から、教師は、ままごとコーナーの玩具やキッチンセットなどを減らしていった。3学期には、段ボールの家の周りに積み木で部屋を作り足したり、机や椅子を作ったりしておうちごっこをする姿が見られるようになった。ある日、「おうちごっこにシャワーがいる。」と、A 児、B 児が箱と長い棒でシャワーを作った。それを見た C 児が「それ何？」と問い掛けた。「シャワーだよ！」と A 児が答えると、「シャワーだけど水ないじゃん！水になりそうな物知ってるよ。」と C 児は言い、製作コーナーにある水色の平らで薄いビニール紐を持って来た。C 児の提案に A 児と B 児は賛成し、何本か水色の平らで薄いビニール紐を付けた。「でもさ、家のシャワーには伸びるのがあるよ。」と B 児が言い、より本物に近付けたいという思いをもち始めた様子であった。そこで、教師と一緒に、教材庫に必要な材料を探しに行くことにした。教師は、幼児が探しやすいように、どこに何の材料があるか、実物を見せていく。しかし、なかなか納得がいく材料が見当たらない様子の3人。そのような中、「これは、水が出るところになりそう！」と、材料を見て新たに作れそうな物を思いついた様子の A 児。「大発見だね！いいなと思った物は持って行っていいよ。」と教師が伝えると、3人はいくつかの材料を手に取る。その後も、シャワーの伸びる部分になる物を探すが、なかなか見付けられない。そこで、近くにあるホースを見せて「こういうのを作りたいんだよね？」と尋ねると、3人共「うん！」と頷いた。3人がイメージしている物が一致していることを確認し、しばらく悩んだが、スポンジ素材のチューブ風のロープを見せ、提案してみた。すると、「それがいい！」と、納得した様子の3人。保育室に材料を持ち帰り、再びシャワーを作り始めた。その後も、必要に応じて、教師は見守ったり手伝ったりした。3人は互いに、思ったことを伝え合いながら、シャワー作りを進めていった。

＜考察＞

・1学期から、幼児の遊びの実態に合わせて、ままごとの環境を変化させていた。そのことで、幼児は遊びに必要な物を自分達で考えて作るようになった。また、友達と思いを伝え合いながら遊びに必要な物を作り、自分達で作った環境で繰り返し遊ぶようになった。このことから、幼児の実態に合わせて数を減らしたり、変化させたりするなど、環境を再構成していくことで、遊び込む姿に繋がると分かった。
・幼児の「本物みたいなシャワーが作りたい」という思いに、教師は、幼児の姿に合わせて見守ったり、一緒に材料を探しに行ったりした。また、材料から作れそうな物を思い付いたことに共感したり、新たな素材を提案したりすることで、自分達でシャワー作りを進める姿に繋がった。このことから、教師は、幼児の実態に合わせて、見守ったり、手伝ったり、共感したり、提案したりすることが大切であると分かった。

＜幼児が遊び込んでいる要因＞

環境構成（〇仮説の繋がる環境 ●環境の新たな要因）
〇幼児が自分で扱える用具や素材の準備 〇幼児の実態に合わせて環境を変えていく（環境の再構成） ●幼児が自分達で遊びの場を作れるような環境 ●遊びが継続できるような環境の配置
教師の援助（☆仮説に繋がる教師の援助 ★新たに捉えた教師の援助）
☆幼児の思いに共感する（思いを受け止める） ☆幼児が遊ぶ姿を見守ったり一緒に遊びを楽しんだりする ☆遊びの実態に合わせて一緒に考えたり提案したりする

事例⑤５歳児　７月『シャボン玉に入ってみたい！』

シャボン玉ができそうな拭き口を身の回りの様々な物の中から探して来て、シャボン玉遊びをしていた。子ども達が興味をもってシャボン玉遊びに関わっていた為、クラスで降園前の時間に「しゃぼんだまじっけんしつ」の絵本を読んだ。その後、クラスでシャボン玉の話題になる。Ａ児「フープでもシャボン玉できそう！」Ｂ児「テレビで中に人が入ってたよ」教師が「フープだったら中に入れそうだね」と言うと「中に入ってみたい！」というみんなの声。「でもフープって大きいよね？どうやって液をつけようか？」と教師が投げ掛けると、それぞれ考え始めた。フープの周りに液を塗る、牛乳パックでフープが入る大きさの入れ物を作るなどの案が出る。教師も一つの案としてコマ台を使う方法を出して、お互いに家でも考えて来て、明日、いろいろ試してみようという話で終わった。

翌朝、Ａ児が「先生、フープでやってみたい！」と楽しみに登園して来た。一緒にフープを用意し、シャボン液が入ったトレイにつけてみるが、やはりフープが大きくて液がつかない。「コマ台でやってみようよ」と昨日の話を覚えていたＡ児。木製のコマ台だと液が染み込んでしまう為、教師は代わりにどろんこプレートを用意し「これでやってみる？」と渡した。興味をもって近付いてきたＣ児は、テレビで見た経験があるようで「包帯を巻いたらできるんだよ」と教えてくれた。園には使用できる大量の包帯が無かった為、代わりになりそうなものをすぐに探し、白色の不織布を子ども達の傍で細長くハサミで切って渡してみた。早速、Ａ児達は教師と一緒に不織布をフープに巻き付けていく。周りで様子を見ていた別の幼児達も興味をもって近寄って来る。

どろんこプレートにシャボン液を流し入れ、フープをつけて試してみる。Ａ児、Ｃ児、Ｄ児の３人がフープを一緒に持って持ち上げてみると、シャボン玉ができかかる。Ａ児「おーできた！」Ｄ児「２人で持ち上げた方がいいんよ」Ｃ児「わたしもやりたいもん」Ｄ児「せーの」と、子ども達は思ったことや気付いたことを言い合いながら繰り返し試して遊んでいる。

しばらくするとＡ児が「中に入ってみたい！」と言う。教師が「どうやって入る？このまま入ったら、液で濡れてしまうね」と答えると、「タオルを敷いて、その上に乗るのは？」とＡ児。「タオルかぁ…」教師は、タオルを敷くと全部液を吸ってしまうのでは？と思ったが、幼児の試してみたい気持ちを大事にしたいと思い、テラスに敷いていた足拭きマットを半分に畳み、液の入ったプレートの中央に置いた。教師「よし、やってみよう」Ａ児「ぼく入ってみたい！」Ａ児がマットの上に乗る。Ｃ児「せーの」４人で一緒にフープを持ち上げた。フープを膝のあたりまで持ち上げた時に、シャボン玉が割れる。教師「あーおしい」Ｅ児「もう一回！」
その後、シャボン玉の中に入る幼児が順番に交代しながら「ゆっくり上げた方がいいよ」「お尻に当たらないように気を付けて」とそれぞれが気付いたことや考えたことを友達に伝えながらシャボン玉の中に入るという目的に向かって繰り返し挑戦していく。

＜考察＞
・クラスで幼児が興味のある遊びに関連する絵本を読んだことをきっかけに、“シャボン玉の中に入ってみたい”という目的や好奇心をもつ姿に繋がった。幼児の興味や関心に沿った絵本選びは、更に新しい好奇心や探求心を掻き立てるきっかけになるのだと感じた。
・クラスで遊びの話題を共有したことで、それが次の日の遊びの目的となり、繰り返し試したり考えたりしながら遊ぶ姿に繋がった。クラスで遊びの話題を共有することで、一人の幼児の興味や関心が周りの幼児にも広がり、その結果、一緒に試したり考えたりしながら遊び込む姿に繋がっていくのだと感じた。
・幼児のしてみたい気持ちに教師が寄り添い、すぐに試すことができるように幼児の声に応じて必要な用具を準備していくことで、幼児の意欲が持続して遊び込む姿に繋がっていくことが分かった。

＜幼児が遊び込んでいる要因＞

環境構成(〇仮説に繋がる環境 ●環境の新たな要因)
〇幼児の興味に合わせて関連する絵本を読んだり、置いておいたりする 〇思ったことをすぐに試すことができる環境、用具の用意
教師の援助(☆仮説に繋がる教師の援助 ★新たに捉えた教師の援助)
☆クラスで遊びの話題を共有する、振り返りをする ☆幼児がしたい思いを実現できるように、幼児の思いに寄り添い、一緒に考える、ヒントとなるものを提案する、手助けをするなどして支える

事例⑥５歳児　１０月『ドングリレーシングカーで遊ぼう！』

クラスで読んだ「ドングリであそぼう」の絵本をきっかけに、その絵本の中に作り方が載っていたどんぐりレーシングカーに子ども達は興味をもった為、次の日から作って遊べるコーナーを屋上テラスに準備した。材料や用具として、クヌギの実や小さいドングリ（穴を開けやすいように前もって水に浸しておく）、竹串、ストロー、段ボール、セロテープ、ビニールテープ、ハサミ、油性ペン、ドングリ穴開け機などを準備した。また、レーシングカー作りのコーナーの傍に遊べるように大型積み木も置いておいた。

Ａ児は３日前からレーシングカーを作って遊んでいる。この日も、大型積み木で作った傾斜で何度も走らせて遊んでいるが、「まっすぐ走らないんだ」「も一何で落ちちゃうんだよ」と少しイライラしている様子。何度走らせても坂道の途中で積み木から落ちてしまい、まっすぐ進まない。「コースアウトしてしまうのは何でだろう？」と教師が投げ掛けるが、Ａ児はレーシングカーの走らせ方ばかりにこだわり、原因がなかなか分からない様子。
そこへＢ児が自分のレーシングカーを走らせにやって来た。教師は、「Ａくんの車、まっすぐ走らないんだって」とＢ児に疑問を投げ掛けてみた。「え？ちょっと見せて」とＢ児はＡ児の車を見て、本体である段ボールとドングリのタイヤとの間に隙間があることで、竹串が左右に動いてしまう為に、走らせた時に曲がってしまうのではないか、と教えてくれた。それを聞いたＡ児はすぐに新しいストローを切って、隙間が埋まるように作り直した。その後も、Ａ児は教師に手助けを求めながら、納得がいくまで何度も作り直しては走らせることを繰り返した。教師はＡ児の思いが叶えられるように、少しずつ手助けをした。

その日のクラスでの遊びの振り返りの時間。Ａ児はレーシングカーを作る中での葛藤を発表したり、Ｂ児やＣ児は作ったレーシングカーのそれぞれのこだわりポイントや次回に作っていく部分などを紹介したりし、クラスで話題の共有を行い、週末を迎えた。

休み明け、教師は目に付きやすい机の上にレーシングカーを並べておいた。朝の支度を終えたＢ児、Ｃ児は早速、先週の続きを作り始めた。Ｃ児、Ｄ児は先週作ったレーシングカーにビニールテープで模様を付けたり、車の上に乗るドングリの運転手をボンドで貼り付けたりと、今日はデザインにこだわって作っている。そしてボンドが乾くまでの間、いろいろな長さの大型積み木や検診台を使って、２人でまっすぐの坂道を作り始めた。「フープを通ったらゴールにしない？」とのＣ児の提案に、教師は「それ面白いね」と共感した。すると、Ｃ児はテラスにあったフープを積み木の下に挟んでトンネルのように立てた。
同じクラスのＥ児やＦ児達もその様子を見て、コース作りに参加し始めた。坂道を長く繋げようとするが、板積み木が滑り落ちそうになる為、下に積み木を置いて傾斜を少し緩やかにし、板積み木が落ちないように工夫する。「ここジャンプ台にしようよ！」「いいね！」「マリオカートもこういうコースあるんよ」と伝え合い、レーシングカーを試しに走らせながら、幼児達は考えたことを少しずつ形にしてコースを作っていく。この日もクラスでの遊びの振り返りでレーシングカーについて話題にあがった。

次の日は、レーシングカーのデザインを更にバージョンアップさせる幼児が多かった。
曲がるストローを折り曲げて貼り付け、車のマフラーのように見立てたり、二台を繋げて長い車を作ったりと、それぞれが互いに友達のレーシングカーに刺激を受け、いろいろな部分にこだわって作りながら遊ぶ様子は続いた。

＜考察＞

・レーシングカー作りのコーナーを屋上テラスに環境として準備していたが、初めは学年の共有スペースである環境に自分から関わっていきにくい幼児が多かった。しかし、クラスの振り返りで遊びの中の出来事を話題にして話し合ったり、登園後に目に付きやすい所にレーシングカーを並べておいたりしたことで、徐々にいろいろな幼児が興味をもって関わる姿に繋がった。やはり幼児にとって目に付きやすい環境、視覚からの刺激の影響は大きいのだと分かった。
・大型積み木やフープなど、園内の用具などを自由に取り込んで遊べる環境は、幼児が思いを巡らせて発想豊かに関われる環境である。教師があらかじめ準備した物だけでなく、幼児が自ら必要な物を取り込んで遊べる環境は、遊び込む上で大切な要因の一つであると考える。
・ドングリレーシングカーの作り方は初めは教師や友達に教えてもらうが、作り方が分かれば、幼児が材料や用具を選んだり、扱ったりしながら自分の力で作って遊べる物であった為、何度も繰り返し試したり作り直したりしながら遊び込む姿に繋がったのだと感じた。教師が常にその場にいなくても幼児自身が遊びを進めていくことができるように環境を設定することが必要だと分かった。

＜幼児が遊び込んでいる要因＞

環境構成(〇仮説に繋がる環境 ●環境の新たな要因)
〇目に付きやすい場所に環境を用意する 〇幼児の興味に合わせて関連する絵本を読んだり、置いておいたりする 〇自由に使える環境、用具（積み木やフープなど） ●教師が携わらなくても、幼児が自分で扱いやすい用具、材料の準備 ●友達からの刺激が受けられるように、作った物を置く場所
教師の援助(☆仮説に繋がる教師の援助 ★新たに捉えた教師の援助)
☆クラスで遊びの話題を共有する、振り返りをする ☆幼児がしたい思いを実現できるように、幼児の思いに寄り添い、一緒に考える、ヒントとなるものを提案する、手助けをするなどして支える

6．幼児が遊び込んでいる要因

仮説を立て、実践を通して遊び込む為に重要だったものや、新たな気付きとなったものを学年ごとにまとめていった。

（3歳児）

○仮説に繋がる環境
・気に入った道具や場所を見付け、安心できる環境 ・興味をもつことができる環境 ・してみたいと思えるような環境 ・幼児の興味に沿った環境
●環境の新たな要因
・一人一人が満足できる豊富な材料や道具の環境 ・道具や材料を自分で選んでしてみることができる環境 ・引き続き遊ぶことができるように思い出すきっかけとなるような目に付く環境 ・発達や季節に合った環境 ・感触や性質の違いに気付けるような環境 ・異年齢児から刺激を受けたり関わったりすることができる環境 ・幼児が偶発的に出会う場、機会 ・次の展開を見通した環境を再構成 ・発見したり不思議に思ったりする感情体験のできる場や物
☆仮説に繋がる教師の援助
・幼児の興味や関心を探り、教師も一緒に遊ぶ（幼児と同じ動きで遊びを楽しむ） ・幼児の気付いたことや興味をもったことに共感する ・言葉が少ない分、表情や動きから興味や関心、心情を見取っていく ・気付いたことや思ったことを受け止める ・自分のしたいことをじっくり取り組むことができる時間を確保する
★新たに捉えた教師の援助
・クラスで遊びの紹介をし、興味をもてるようにする ・周りの幼児がしていることに関心がもてるようにする

（4歳児）

◯仮説に繋がる環境構成
・自由に遊びを選択することができる環境 ・幼児が自分で扱える用具や素材の準備（布ガムテープ・平らで薄いビニール紐・段ボールなど） ・幼児がイメージをもちやすい絵本や図鑑を準備（紙に書いてイメージしやすくするなど） ・幼児の実態に合わせて環境を変えていく（環境の再構成）
●環境の新たな要因
・異年齢児（年長児）の姿から刺激を受ける場、機会 ・目に付きやすい場所に環境を用意する ・必要な時に手に取りやすい素材・用具の準備 ・幼児が自分達で遊びの場を作れるような環境 ・幼児が作った遊びの場を使いやすいように整える ・遊びが継続できるような環境の配置
☆仮説に繋がる教師の援助
・幼児の思いに共感する（思いを受け止める） ・幼児が遊ぶ姿を見守ったり一緒に遊びを楽しんだりする ・遊びの実態に合わせて一緒に考えたり提案したりする ・クラスで遊びの振り返りをする（友達に伝えることで遊びの再体験をする、友達からの刺激で興味を広げる）
★新たに捉えた教師の援助
・状況を言葉にして説明することで、幼児が自分でしていることを再認識したり、考えるきっかけとなるようにしたりする ・幼児の姿や遊びを通し幼児理解を深め、友達同士を繋げる

（5歳児）

◯仮説に繋がる環境構成
・目に付きやすい場所に環境を用意する ・幼児の興味に合わせて関連する絵本を読んだり、置いておいたりする ・自分で選択できる環境、自分達で考えて工夫できる教材（材料）の出し方 ・自由に使える環境、用具（積み木やフープなど） ・思ったことをすぐに試すことができる環境、用具の用意
●環境の新たな要因
・教師が携わらなくても、幼児が自分で扱いやすい用具、材料の準備 ・幼児の実態に合わせ、願いに沿った環境の再構成 ・遊びと遊びが繋がる為の場の配置 ・友達からの刺激が受けられるように、作った物を置く場所 ・遊びが継続できるような環境の設置
☆仮説に繋がる教師の援助
・クラスで遊びの話題を共有する、振り返りをする ・教師も友達の一員となって一緒に遊ぶ ・自分達で考えたことや思いが伸び伸びと実現できる場や雰囲気作りをする （＝幼児の発想に共感したり、気付きや思いをしっかりと受け止めたり、認めたりしていく） ・幼児がしたい思いを実現できるように、幼児の思いに寄り添い一緒に考える、ヒントとなるものを提案する、手助けをするなどして支える
★新たに捉えた教師の援助
・教師が一緒に（製作物などを）作ることで、きっかけ作りとなるようにする ・状況を言葉にして説明することで、幼児が自分でしていることを再認識したり、考えるきっかけとなるようにしたりする

7. 研究成果

○幼児の変化

＜3歳児＞

繰り返し遊ぶ姿、自分からしてみたい、こうしたいと思いを出しながら遊ぶ姿が増えた。

＜4歳児＞

遊びを繰り返し楽しむようになったり、友達と関わりながら楽しんだりする姿が増えた。

＜5歳児＞

自分達で遊び方を考えたり、してみようとしたりする姿が増えた。

○園内研修（研究）を通して、教師自身の保育に対する考え方や気持ちの変化

・幼児の言葉や表情、行動に対して、興味や関心、気持ちや内面を教師がどう読み取り、どう捉えるかが大切だということが分かり、まずは幼児の願い（こうしたいという思い）を意識して探っていくようになった。

・幼児の姿から指導計画をしっかりと立て、幼児に何を経験させたいのか教師がしっかりと願い（ねらい）をもって関わることが大切だと分かった。そして保育を振り返り、環境を再構成していく大切さを改めて感じた。

・遊びを援助する際に、教師の思いが出過ぎていないかと迷い、援助のタイミングを逃してしまうこともあった。しかし、その時に考えた援助を実践し、目の前の幼児の姿の変化を観察したり、援助を振り返り、反省や修正をしたりしていけばよいのだということが分かり、以前よりも幼児との関わりを楽しみながら保育ができるようになった。

8. 今後の課題

研究を通して、幼児が遊び込む為の環境構成と援助を探るにあたって、まずは幼児理解をすることの大切さを改めて感じると同時に、読み取りの難しさも感じている。幼児の言動に対して教師がどう読み取り、どう捉えるかによって、援助の仕方も変わってくると考える。その為、今後も記録をとり、その積み重ねから理解を深めたり、教師間で情報を出し合い多くの目で捉えたり、写真やビデオでの記録を活用したりするなどして、様々な方法、角度から幼児理解について深めていきたい。そして、これからも楽しんで保育を行いながら、幼稚園全体で組織的、計画的に専門性を高めていきたい。